琉球大学学術リポジトリ

染織文化のグローカル・ヒストリー
-八重山ミンサー織を中心として-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学国際地域創造学部地域文化科学プログラム 公開日: 2024-05-21 キーワード (Ja): 染織文化, イカット・ロード論, 八重山ミンサー織, 伝産法, グローカル キーワード (En): 作成者: 琉球大学西洋史研究室, 池上, 大祐 メールアドレス: 所属: 琉球大学西洋史研究室, Faculty of Global and Regional Studies, University of the Ryukyus
URL	https://doi.org/10.24564/0002020368

地理歴史人類学論集　No.13 (2024) pp.161-177
Journal of Geography, History, and Anthropology

［　報　告　］

染織文化のグローカル・ヒストリー

—八重山ミンサー織を中心として—

琉球大学西洋史研究室*　著
池 上　大 祐**（解題）

A "Glocal" History of Textile Arts with a focus on Yaeyama Minsah-ori Weaving

Written by Western History Seminar, University of the Ryukyus
Daisuke IKEGAMI: Bibliographical Introduction
（Faculty of Global and Regional Studies, University of the Ryukyus）

要　旨

沖縄の染織文化は周辺地域の影響を受けながら発展してきたが、近代に入ると「沖縄的なもの」は否定され、減退していったものの、柳宗悦ら日本民藝協会の沖縄調査によって沖縄の美術工芸品の評価は回復していった。沖縄戦を経て染織文化は再び減退するものの、復興の過程で染織の組合が各地で設立され、再興が進行した。再興の過程で新しい染織も誕生している。現代において染織は、より地域の人々と密着した存在となり、あらゆる立場の人々が個々に、そして協働してそのあり方を模索する時代となった。

沖縄の染織文化から見て取れるのは、ローカル・ナショナル・グローバルのせめぎ合いの様相である。この側面は沖縄の染織においてのみ見られるものではなく、たとえばアメリカン・インディアンのナバホ族の織物においても見られる。本研究では数多くある沖縄の染織の中から八重山ミンサー織を取り上げ、そのせめぎ合いを分析していきたい。

キーワード：染織文化、イカット・ロード論、八重山ミンサー織、伝産法、グローカル

はじめに

（1）問題の所在

本研究は、琉球大学国際地域創造学部地域文化科学プログラム西洋近現代史研究室における、2022 年度の共同研究「沖縄のなかの世界史発掘プロジェクト」の成果である。このプロジェクトは沖縄の地域の歴史が世界史の中でどのように位置づけられるのかについて、フィールドワークや文献調査を行い、ゼミ生で共同して一つの論文を仕上げていく取り組みである。従来の

---

* 2022 年度のメンバーは以下とおり（学年は論文執筆時）。井上実歩子［3 年生］、島尻登夢［３年生］、名幸直利［3 年生］。

** 琉球大学国際地域学部准教授

琉球・沖縄史、日本史、世界史という枠組みにとらわれず、複合的な視点で地域を分析し、現代に続く沖縄の様々な歴史問題や文化について再考していくことを目的としている[1]。過去の研究の事例としては、八重山地域の戦争マラリアを事例としたものや、読谷村をフィールドに設定した人物史などがある。今回は、これまでの研究成果を踏まえ、本プロジェクトでは初となるのだが、「モノから見る歴史」を主軸とし、沖縄地域の染織文化、特に八重山ミンサー織を中心に研究を進める。

沖縄において染織は、現代でも非常に重要な文化として根付いており、沖縄各地に染織の組合があり、見学会や展示即売会を開いている。また那覇市の県立首里高校には染織デザイン科があり、毎年卒業展示を行うなど、教育の面でも重要視されている。現代の沖縄の染織は、過去のそれとは大きく形を変えている。たとえば2020年4月に那覇市首里当蔵に開館した「首里染織館Suikara」では、現代風にアレンジされ、日常使いを想定したグッズの販売が行われており、石垣市登野城の「あざみ屋みんさー工芸館」でも同様にグッズの販売が行われているほか、過去の紅白歌合戦にて歌手に提供した衣装のレプリカやパリコレクションへ出品されたドレスの展示が行われている。他にも伝統的な技法を用いた織物を現代風に再構築した沖縄発のブランドもいくつかあり、市場における需要の高さがうかがえる。

このように現代においても染織は沖縄の文化的多様性を構成する要素として重要な役割を担っている。では沖縄の染織文化は、どのような過程で現代まで受け継がれてきたのだろうか。本研究においては、前近代から現代にかけての染織文化のありようを分析し、継承の過程を明らかにしたうえで、沖縄の染織文化がもつグローカルな側面について考察する。

（2）先行研究の整理

近年、織物と世界史をつなげる研究が盛んになってきている。ソフィ・タンハウザーによる研究は、衣服を軸に人類の歴史を描き、衣服をたどることでジェンダー規範や労働問題、階級問題、人種問題や環境問題につながることを明らかにしている[2]。またヴァージニア・ポストレルによる研究においては、織物と文明―すなわち文化、政治、経済―のつながりが明らかにされている[3]。また個別の事例に着目した研究としては、エリカ・ブシュメクによるナバホ織の研究がある。その中ではナバホ族の織物がグローバル世界の中で発展しながらも政府の思惑や市場の論理というナショナルな文脈において翻弄されるさまが明らかにされ、ナバホ織というローカルなものがもつ価値についての考察がなされている[4]。

これらの研究において共通しているのは、織物と文明のつながりを強調している点である。また興味深いのは、そのつながりが一国の中で完結せず、周辺地域を巻き込みながら形成されていったナバホ織のような事例が存在することである。ナバホ織のこの側面は、本研究が取り上げる八重山ミンサー織とも共通している。

次に沖縄の染織文化に関する先行研究を整理する。沖縄の織物研究の先駆として挙げられるの

---

[1] 本プロジェクトの目的は例年共通していることから、冒頭のプロジェクト概要については、過去の調査報告における記述と一部重複する箇所があることをご了承いただきたい。

[2] ソフィ・タンハウザー著、鳥飼まこと訳『織物の世界史－人類はどのように紡ぎ、織り、纏ってきたのか』原書房、2022年。

[3] ヴァージニア・ポストレル著、ワゴナー理恵子訳『織物の文明史』青土社、2002年。

[4] Erika Marie Bsumek, “Value Added in Production and Trade of Navajo Textiles: Local Culture and Global Demand,” in A. G. Hopkins, ed., *Global History: Interaction Between the Universal and the Local*, Red Globe Press, 2006.

が田中俊雄の研究である。田中の研究は、沖縄の衣服づくりの本源は物的生産ではなく霊力の容器を形成する精神的意味を持つものであったと分析するものであった[5]。

前近代の沖縄の染織文化を分析した研究としては、安江孝司の研究が挙げられる。安江は、琉球・沖縄文化の史的位置づけの一つである「イカット・ロード」論を用いて前近代における沖縄の染織文化を分析している[6]。また安江は他にもいくつか研究を行っているが、その多くは沖縄の染織文化と周辺地域のつながりに着目したものとなっている。前近代において沖縄の染織文化は交易などを通じてグローバルに発展してきたといえる。

近代の沖縄の染織文化についての研究において重要視されているのが、柳宗悦ら日本民藝協会の沖縄調査である。たとえば久貝典子は、日本民藝協会の活動を分析し、彼らが沖縄の美術工芸品に対して持っていたまなざしについて論じている[7]。この時代の染織文化から見えてくるのは、日本の近代化の流れが沖縄にも上陸し、染織のあり方が変化していく様である。そしてその近代化に対して、柳ら日本民藝協会のように古来より存在する美術工芸の価値を見出そうとする流れも存在した。

現代の沖縄の染織文化に関する研究の代表例が、松本由香と佐野敏行の研究である。松本と佐野は、現代沖縄の染織が地域文化や経済とどのように結びついているかを明らかにし、その持続性に関して考察を行っている[8]。現代の沖縄においては新しい染織も誕生している。それらの多くは、伝統的な技法を継承しながらも、デザインや用途に関しては極めて現代的である。沖縄の染織文化は、形を大きく変えながらも発展し、今日に至る。

また本研究が着目する八重山ミンサー織に関して、小田原澪は、あざみ屋みんさー工芸館の初代館長である新絹江氏の活動や当時の竹富島と石垣島における「八重山ミンサー」という名称をめぐる問題を取り上げ、研究を行っている[9]。また新絹江氏と夫の新哲次氏については小橋川順市が評伝研究を行っている[10]。本研究に際し、我々は 2022 年 11 月に石垣島へのフィールドワークを実施した。フィールドワークにおいては、「あざみ屋みんさー工芸館」および「みね屋工房」を訪問し、機織り体験を行った。

内容に入る前に、本研究が重視する「グローカルな視座」について木畑洋一の論考[11]をもとに整理しておきたい。グローカルな視座とは、地域的な文脈とグローバルの視点を組み合わせたものであり、「グローカル・ヒストリー」とはその視座を用いた歴史研究のアプローチである。

1990 年代以降、歴史学においてグローバル・ヒストリーが台頭し、これまで中心とされてきたヨーロッパを相対化しようとする動きが盛んになった。こうしたグローバル・ヒストリーの台頭と同時並行的に、地域についての議論も活発になった。この議論の中で、研究対象となる地域は、地理的に固定されるようなものに限らず、歴史家の課題意識に応じて設定されるものとして

---

[5] 田中俊雄『沖縄織物裂地の研究』明治書房、1952 年。
[6] 安江孝司「「イカット・ロード」と琉球・沖縄絣の史的文化意義—識者の所説を通して見た一つの理解—」島尻勝太郎・嘉手納宗徳・渡口真清三先生古希記念論集刊行委員会編『球陽論叢』ひるぎ社、1986 年。
[7] 久貝典子「日本民藝協会同人の沖縄調査—昭和 13 年～15 年にかけて—」『沖縄芸術の科学：沖縄県立芸術大学附属研究紀要』第 22 巻、2010 年、21－63 頁。
[8] 松本由香／佐野敏行『沖縄の染め織りと人びとの暮らし—家族と地域文化、経済とツーリズムから考える—』琉球新報社、2020 年。
[9] 小田原澪「地域文化としての伝統工芸の現在—石垣島ミンサー織を事例に—」『沖縄文化研究』第 28 号、2002 年、383－438 頁。
[10] 小橋川順市『ミンサー織の夢を追いかけて』沖縄タイムス社、2015 年。
[11] 木畑洋一「歴史学におけるグローカルな視座」『グローカル研究』第 2 号、2015 年、113－120 頁。

認識されるようになった。

こうした流れの中、ナショナル・ヒストリーの相対化が問題となった。近代歴史学の王道ともいえるナショナル・ヒストリーは、国民国家形成と展開を支える重要な役割を持っており、グローバル・ヒストリーの潮流の中で様々なナショナル・ヒストリーを並列させて世界史を描こうとする動きは存在していた。またローカル・ヒストリーにおいても、地域についての議論がナショナルな文脈に収れんされていく傾向があった。ナショナル・ヒストリーを相対化するためにもグローカルな視座というものが重要になるのである。

グローバルな視座とローカルの視座を結び付ける方法論として挙げられるのが、小さな地域についての考察を、その地域のみにとどめるのではなく、またナショナルなレベルに収れんさせるのでもなく、グローバルな問題につなげるというものである。この方法論を用いた研究が、河西英通らの研究[12]である。また福岡大学人文学部歴史学科西洋史ゼミの取り組みでは、自らの生活する土地の歴史を世界史に繋げる試みがなされている[13]。グローカルな視座は、自らの足元を理解するうえでも非常に重要なものとなっているのである。本研究においては、八重山ミンサー織を事例として取り上げ、沖縄の染織文化の継承過程を、グローバル・ナショナル・ローカルの三要素のせめぎ合いの中に位置づけ、考察することで、沖縄のなかの世界史を理解する一助としたい。

Ⅰ．沖縄における染織文化の概観

たくさんの離島が存在する沖縄において、織物は地域によって異なる特色を持った織物がおられてきた。分布として例を挙げると、沖縄県北部の大宜味村喜如嘉の芭蕉布、中頭郡読谷村の読谷山花織（ゆんたんざはなうい）、那覇市首里における首里織、久米島の久米島紬、宮古島の宮古上布などが挙げられ、実際にはこれ以上に様々な織物が見ることができる。

このように地域ごとに異なる理由の一つとしては、身分による衣服の指定が王府によってされたことが挙げられる。一六世紀の初め頃から、尚真王は官職にある者のはちまきの制を制定して、金、銀、真鍮のかんざしで貴賤の別を付け、五色のはちまきで上下の別を表示し、その他、着物、帯、履物にいたるまで制定したといわれている[14]。実際に 19 世紀頃の記録として、1875 年に首里王府から八重山に布達された「富川親方八重山島諸締帳」の中では、身分ごとに細かく布や身につけていい装飾などが指定されている[15]。そのため、各地域の染織ではその材料や織り方に多様さを見ることができる。

材料に見ると、苧麻や木綿、芭蕉などが主に挙げられ、糸の染料としては、藍が一般的に使われ、首里では王族や士族が着用する他の色の染料も使われていた。黄色系統であればうっちん（ウコン）、赤色系統であればハチマチバナ（紅花）などである[16]。

また、織り方で見れば平織である絣や縞、平織とは別の紋織などが挙げられる。紋織は花織に代表されるような、織物の糸の組み合わせを構造的に変化させることによって出来上がる織り方

---

[12] 河西英通／浪川健治／スティール、M・ウィリアム編『ローカルヒストリーからグローバルヒストリーへ』岩田書院、2005 年。

[13] 星乃治彦／池上大祐監修、福岡大学人文学部歴史学科西洋史ゼミ編著『地域が語る世界史』法律文化社、2013 年。

[14]石垣市史編集委員会『石垣市史　各論編　民俗　上』石垣市、1994 年、256 頁。

[15] 同上。

[16]那覇市企画部市史編集室『那覇市史　資料編　第 2 巻中の 7　那覇の民俗』那覇市、1979 年、352 頁。

である[17]。

このように、織物と一口にいっても構成要素がとても多く、さらに織り手が置かれていた環境や植生、伝播の時期なども島や地域ごとに異なる。そこで、今回は現在伝統工芸品にも指定されている八重山ミンサーについて調べていく。

Ⅱ．前近代におけるミンサー織の登場

そもそもミンサーとは、綿織物の一つであり、「ミン」は「綿」を「サー」は「狭」の漢字が当たり幅の狭い綿の帯の意であると解釈するのが一般的とされている。また、「綿紗」という説もあり、これは「中国と沖縄との歴史的交流、絣の伝播のルートから考えて綿花糸で織ったものは綿紗という。中国の辞書には綿紗は、絹の糸のような細い糸のこと」として語解している、とされている[18]。

では、ミンサーが織られ始めたのはいつごろからだったのだろうか。ミンサーを織る際必要となる綿が八重山に伝わったのは 1634 年頃のことである。それ以前の記録として先島諸島における織物に関する文献は、最も古いもので 1477 年の朝鮮済州島漂流民による見聞記（『李朝実録』）であり、その中で与那国島の項に「麻や木綿がない。又、蚕も養はない。唯、苧を織って布となすのみだ。（中略）藍青が染めてある」（『伊波普猷全集第五巻』）と記されている。残念ながら、竹富島、石垣島に立ち寄っておらず、八重山のみに関する記述はない[19]ものの、当時の織物については似たようなものであったと推測できる。

八重山に綿を持ち込んだのは池城安師という人物であったとされている。沖縄への持ち込み自体は 1611 年に儀間真常が薩摩から木綿を持ち帰って栽培したことに始まるが、八重山はそれよりも遅れて始まることとなった。池城安師は当時、国禁とされていたキリスト教徒であるとして嫌疑を受け、流罪となり、流罪先であった慶良間島で木綿栽培から織り方までを習得した。帰郷後、八重山に木綿織を伝えたとされている[20]。

次に技法から見ていこうと思う。ミンサーは絣模様の細帯であり、「四つ玉、五つ玉」の絣模様が特徴的な織物である。ミンサーの模様には一つ一つ意味があるとされ、「四つ玉、五つ玉」には「いつの世までも末永く」、「ムカデの足」と呼ばれる両耳の白と藍が交互する両端の模様には「足しげく通ってきてください」、「タテスジ」と呼ばれる絣柄を挟む 2 本の線には「道を踏み外すことなく、愛を育ててほしい」という願いがそれぞれに込められているとされている[21]。もともと、通い婚の時代に女性から男性へ婚姻の際に送るものであるとされ、そのような意味がつけられているが、ミンサーの気品あふれる絣柄の「四つ玉、五つ玉」は、インド（オリッサ地区、アンドラ＝ブラデッシュ地区）、アフガニスタン、インドネシアのテンガナンの絣柄と類似しているという記述[22]もみられることから、意味付けは後からのものであったように推測できる。

絣が伝わった年代に関しては、岡村吉右衛門氏が 1430 年、次いで 1467 年にタイとマレーシア

---

17 田中俊雄／田中玲子『沖縄織物の研究』紫紅社、1976 年、55 頁。
18 通事孝作「八重山ミンサー」『繊維と工業』Vol.62,No.8、2006 年、249 頁。
19石垣市史編集委員会『石垣市史　各論編　民俗　上』石垣市、1994 年、255 頁。
20 同上、699 頁。
21竹富町史編集委員会編『竹富町史第 2 巻　竹富島』竹富町役場、2011 年、374 頁。
22 同上、374 頁。

から沖縄に伝わったことが文献によって知り得るとしており、同時代に琉球において始まっていた南方貿易について触れ、彼地に3，4か月滞留を余儀なくされていたこと、それによって当時インドネシアで織られていた絣を知らないはずはなかったと思えるとしている[23]。また、石垣市史のなかでもマレー語で「イカット」と呼ばれている南方の絣が14，5世紀、シャム、マラッカ、スマトラ、ジャワなどの南方交易によってもたらされたとし、南方諸国の国王が琉球国王に送ってくる礼物のなかや、また約3か月は風待ちで滞在する貿易船の乗組員たちの手によって現地で直接伝習されたものと、二通り推察されると述べている[24]。しかしどの文献においても、このような南方の地域の絣と沖縄における絣はその色合いや軽さ、涼しさが違うとしていて、沖縄の絣が独自に発展していることを示している。

このような絣の伝播については安江孝司氏がまとめた「イカット・ロード論」に関する論文が詳しく述べている。ここでは詳しくは触れないが、模様や織り方から南方ルートと中国を通る大陸ルートの2つを挙げ述べており、絣が東南アジア諸国や中国などと深い関わりを持っていることがわかる[25]。

ここまで、ミンサーを形作る2つの要素から見ていったが、どちらをみても沖縄という一つの地域で完結したものではなく様々な要素が入り交じり、さらに様々な場所との交流を経て伝わってきたものが沖縄で発展していったことがわかった。

次章では、琉球処分を経た近代沖縄における染織文化の変遷についてまとめる。

Ⅲ．近代沖縄における染織文化の変遷

（1）「沖縄県」の新たな染織文化

1879年4月4日、明治政府は琉球藩の廃止と沖縄県の設置を内外に布告し、日本国としての沖縄県が誕生した。明治政府による沖縄県統治の基本方針は、政府に抵抗する士族たちの不満を逸らし、現地住民の生活環境の変化を最小限に抑えるために従来の制度を維持したまま統治する、いわゆる「旧慣温存」であった。そのため、人頭税制度も維持され、琉球王国時代に税として納めることが課されていた織物は、貢納品であり続けた。こうした琉球時代の制度を維持しようとする動きがある一方で、和服の着用を推奨するなど同化を意識した政策も見られた。しかし、琉装から和服への移行が急激に進むことはなく、これらが合体した「和琉折衷」ともいえるような衣裳も見られ、外来の文化を柔軟に取り入れた新たな衣裳のかたちが生まれた。このように、日本国に包括された近代沖縄の染色文化は、日本国の動向に呼応する形で変遷していくこととなる。

殖産興業政策を掲げた明治政府は、産業の近代化を図る目的で勧業博覧会の開催を推進した。廃藩置県後の沖縄も、1881年の第2回内国勧業博覧会に参加し、県産の織物や漆器等を出品した。そこで上位入賞した絣柄は新聞に公開された。輸出用として作る織物は日本本土の好みに合わせる必要があったため、新聞に公開された他県の絣柄を取り入れていった。一方、琉球王国時代から織られていた琉球独自の絣柄は手間もかかることから次第に織られなくなる。こうし

---

[23] 藤本均『藤本均コレクション　絣の道』毎日新聞社、1984年、191－192頁。
[24] 石垣市史編集委員会『石垣市史　各論編　民俗　上』石垣市、1994年、735－736頁。
[25] 詳しくは安江孝司「「イカット・ロード」と琉球・沖縄絣の史的文化意義―識者の所説を通して見た一つの理解―」島尻勝太郎・嘉手納宗徳・渡口真清三先生古希記念論集刊行委員会編『球陽論叢』ひるぎ社、1986年を参照。

た動きに対応して織物生産の場も変化した。1886 年には首里に織物工場が設立され、各地に設置されるようになると、家内工業だった織物は集約生産へと変化し、均質化した。さらに高機や自動織機が導入され機械化が進むと、大量生産に適した柄だけが作られるようになった。

日清戦争以降、それまでの旧慣による統治が改良されて日本人への同化がより強調されるようになると、琉球の染織文化は日本本土との交わりの中でその様相をますます変化させていった。1903 年（宮古・八重山では 1902 年）、人頭税が廃止されると、織物の貢納義務は無くなり、織物の自由売買が可能になった。このことは、沖縄の染織文化の転換点となった。琉球の染織は、日本というより大きな市場に接し、そこに存在する需要に応えるかたちで新たな技術やデザインへと変化したのである。またこの年は、女子向けに設置された初の実業学校である首里区立女子工芸学校が開校した年でもあった。そこでは県の重要な輸出品である織物を作る知識と技術をもった生徒の養成が目指されたが、授業内容は日本本土の技術が中心であり、沖縄の地方色は薄いものであった。卒業して故郷に戻った生徒は、学校で学んだ知識や技術を普及させる役目を果たした。また、琉装から和服への転換を促す動きは教育の場でも見られ、日本へ同化することが近代化とみなされていた時代の中で、伝統的な服装や風俗が否定された。

（２）貢納品から特産品へ

明治末期から大正初期にかけて、那覇港が整備され大型船が就航できるようになると、沖縄にはビジネス客だけでなく、観光客も多く来沖するようになった。また 1930 年代、世界的な不況により織物の輸出量が減少傾向になると、県は観光振興に力を入れるようになり、パンフレットを製作して観光客誘致を積極的に行った。

来沖した観光客の好んだ沖縄土産は織物、漆器、陶器、泡盛、パナマ帽などで、中でも久米島紬や宮古上布、八重山上布といった絣の織物は県外に多く輸出され定評があったため、人気が高かった。パンフレットには、特産品として染織品が必ず紹介された。例えば、県外向けの泡盛のポスターには、紺絣の着物を着た女性が描かれ、沖縄と絣とをイメージで結びつけようするさまを読みとることができる（図１）。また、琉球織物の宣伝ポスターにおいても、沖縄の特産である陶器や泡盛を取り扱う（図２）など、沖縄県は特産品を利用した観光客誘致をおこなっていたのである。

前節から見てきたように、琉球が日本国に包摂される過程で、日本本土から新たな技術が導入され、琉球王国時代より培われてきた染織技術と混じり合い、新しい染織文化が生まれた。こうしてつくられた織物は、貢納品から特産品へとその様相を変化させるに至った。しかし、柳宗悦を代表とする日本民藝協会は、近代的な設備で作られた新しい染織を批判し、琉球王国時代から続く伝統的な染織に価値を見出した。

（３）日本民藝協会と琉球染織の再興

日本民藝協会の初代会長となった柳宗悦は、朝鮮の仏像や陶磁器にその美しさに魅了され、無名の職人によって作られ、民衆の生活に厚く交わる工芸品の中にこそ美の姿があることを発見した。こうした視点は、沖縄へも向けられることとなり、1938 年から 1940 年にわたって柳宗悦を団長とする日本民藝協会一行は計 4 回の沖縄調査を行った。第 3 回の沖縄調査の際に県は、工業指導所や織工房などを案内し、近代的な設備で建てられた新しい模様の絣や紅型作品を紹介し

た。しかし柳は全く興味を示さず、琉球王国時代の伝統的な素材・技法の衣裳を購入し持ち帰った[26]。柳は琉球染織に対する美へのこだわりを自著の中で以下のように表している。

> さうして現存する日本の織物の中で、最も秀でゝゐるものゝ一つが芭蕉布なのです。不思議なことに私たちは未だ嘗て醜い芭蕉布の一枚をも見たことがありません出来榮えに多少の上下はあるとしても、いずれも危げのない品物ばかりです。假りに醜いものがあつたとすれば、今までの手法を棄てゝ何か新しい試みを企てたものに違ひありません。それほど傳統の道を踏む芭蕉布は安全な健全な織物なのです[27]。

こうした思想は、日本に包摂される中で近代化される琉球の染織文化に、疑問を投じるきっかけとなり、琉球王国時代から続く伝統的な染織文化の再興を目指そうとする動きを生み出したのである。

以上、本章では近代沖縄における染織文化の変遷を見てきた。琉球の染織は、日本に包括されながら、貢納品から特産品へと変化していった。日本国内において、近代的な技術や思想、ナショナルな動きが強まるなか、「沖縄県」の人々も「日本人らしさ」が求められ、「沖縄的なもの」が否定されるようになった。こうした時代に即して、琉球の染織文化も変化を余儀なくされたのである。しかし、日本民藝協会は琉球王国時代から続く染織文化に価値を見出し、琉球の染織文化の美しさを内外に発信する役目を果たした。この日本民藝協会は、沖縄本島のみに限らず、宮古島や八重山といった、よりローカルな地域にも目を向け、真の美を追求した。その過程で、琉球の染織文化が衰退傾向にあることを知った民藝協会メンバーの中には、その再興に尽力する者も現れた。

次章では、戦後沖縄の染織再興について分析する。

Ⅳ．戦後沖縄における染織の再興

（1）戦後の沖縄社会の概略

戦後沖縄における染織の再興をみる前に、米軍統治期から 1990 年代ごろまでの沖縄の社会状況を概観する。1946 年 1 月、GHQ 覚書により北緯 30 度以南が日本から分離され、沖縄は米軍の統治下に置かれることとなった。1951 年にはサンフランシスコ講和条約が締結され、翌年 4 月に施行された。これにより国際法上、日本と連合国との間の戦争状態が終結した。同時期に琉球政府が発足し、行政、司法、立法の三権分立制に基づいた住民側の自治機構が整い、初代行政主席には比嘉秀平（1901－1956）が任命された。

1955 年 5 月、沖縄各地で行われていた米軍による土地収用に対して、比嘉主席を含めた 6 名が渡米折衝を行った。これに応じて、10～11 月に米国下院軍事委員会のメルヴィン・プライス（1905－1988）を委員長とする調査団が来沖し、調査を行ったものの、調査団は 54 年に米国民政府が出した「軍用地料一括払い」の方針を支持しており、翌年 6 月の「プライス勧告」は沖縄側の要求を無視するものであった。これを契機として、島ぐるみ闘争が展開されていくことになる。1956 年 10 月に比嘉主席が急死し、当間重剛（1895－1971）が第 2 代行政主席に任命され

---

[26] 那覇市立歴史博物館企画展「近代沖縄の染織」（2022 年 10 月 28 日～12 月 26 日）冊子を参照。
[27]柳宗悦『芭蕉布物語　新版』榕樹書林、2016 年、5－6 頁。

た。当間の那覇市長退任に伴い、同年 12 月に市長選が行われたのだが、そこで、人民党事件の契機を終えて出所して間もない瀬長亀次郎（1907－2001）が当選し、政界を大きく揺るがすこととなったが、翌年の米軍による布令改正により、瀬長は 11 月、瀬長は那覇市長職を失職した。

1960 年 4 月、沖縄県祖国復帰協議会（以下復帰協）が結成され、同年 6 月にアイゼンハワー大統領が来沖した際には 59 年 6 月の宮森小学校ジェット機墜落に対する賠償運動と呼応して「アイク請願デモ」を行った。その後、当時アメリカがベトナムに介入していったことも関連し復帰協をはじめ沖縄の本土復帰を志向した運動が活発になっていく。1965 年 2 月、米軍による北ベトナムへの爆撃が開始されると、沖縄米軍基地の使用が活発になっていった。沖縄が攻撃基地として利用されたことは、沖縄社会にとって衝撃であり、当時琉球政府行政主席であった松岡政保（1897－1989）や与野党が抗議する事態となった。同年 8 月、沖縄施政権返還を掲げ首相に就任した佐藤栄作（1901－1975）が来沖した。

1967 年 11 月の佐藤・ジョンソン共同声明において「両三年内」に返還時期を合意することが明記された。このころには沖縄における保革対立軸が明確なものとなっており、その後の主席公選において大きな影響をおよぼすことになった。1968 年 11 月の主席公選においては、即時復帰・基地反対の立場をとった革新側の屋良朝苗（1902－1997）が当選し、その 1 年後の 69 年 11 月には、佐藤・ニクソン共同声明によって「72 年・核抜き・本土並み」の沖縄返還が決定した。しかしながら、この合意は米軍による緊急時の核持ち込みと基地の自由使用を「密約」によって受け入れることでなされたものであった。1972 年 5 月 15 日、東京・日本武道館と那覇・那覇市民会館をテレビ中継し、沖縄復帰記念式典が開催された。東京で挨拶を行った佐藤栄作首相は、戦争によって失った領土を平和外交によって回復したことを強調し、アピールを行ったものの、那覇において挨拶を行った屋良朝苗主席は、復帰の内容がこれまで望んできたものではないものであることを主張した。

1975 年 7 月、沖縄国際海洋博覧会が開催された。博覧会は翌年 1 月まで開催され、来訪者は約 349 万人、事業費総額は 3,400 億円であった。海洋博の開催に伴い多くの公共事業が行われ、社会資本が整備された。また誘客の観点から、海洋博は地域振興の意味合いも兼ねていた。しかしながら海洋博後は不況に見舞われ、沖縄の経済状況は悪化していった。これを背景として、1978 年 12 月の沖縄県知事選では、保守の西銘順治（1921－2001）が当選し、日本政府との緊密な連携を期待され、10 年ぶりに保守県政が誕生した。西銘は 85 年 5 月、沖縄県知事として初めて渡米した。西銘はアメリカ政府高官と会談し、沖縄基地問題解決へ向けた提案を行った。西銘県政の特徴は、安保体制を容認しつつも基地負担の軽減を重要施策として設定していた点である。

沖縄の本土復帰から 20 年が経過した 1992 年 11 月、首里城公園が開園した。またこの時期には琉球王国を題材にしたドラマが放映され、全国的に沖縄が注目されるようになった。90 年代に入ると、沖縄の文化的多様性が観光資源として認識されるようになった。90 年代のこうした状況は「沖縄ブーム」と称される[28]。海洋博以後形成されたリゾート地としての沖縄イメージとは違う、新たな沖縄イメージの形成が加速したのである。

---

[28] 本研究では、当時の沖縄ブームと染織再興の動きがどのように連関していたかについて分析することができなかったので、今後の課題としたい。

（2）戦後沖縄における染織の再興

沖縄戦が終結してからの復興の過程で、各地の染織の再興も進行した。この時期から染織の組合が各地で設立されるようになり、地域の人々が協力して染織の再興に取り組むようになった。たとえば南風原町における織布の生産は、戦前と比較して、「ドル時代」と呼ばれるアメリカ統治時代のほうが多かった。この生産数の上昇を後押ししたのが、1959 年の琉球工業研究指導所の設立であった。所員たちは織り手の育成のために南風原や沖縄各地で技術指導を行った。当時の沖縄における洋装化は始まったばかりで、需要は多くあったのである。

本島北部では、他地域に比べて早くから洋裁教習所が設立されている。1945 年に石川、1946 年に辺士名に洋裁講習所が設立され、同時期、名護に文化服装学院が設立されている。こうした技術者養成の動きから、戦後沖縄においては、洋服の仕立ての技術を持つ人材が求められていたことが分かる。染織布を自家でつくることが一般的であった本島北部では、芭蕉布や木綿・麻などを用いた小幅織物や反物を洋服の素材に転用しようとして、仕立て技術を習うことが盛んになったと考えられる。素材は、地元の手織布から始まり、東南アジアからのシルクや更紗などへも応用され、さまざまな素材の仕立てが行われるようになった。

1972 年の本土復帰前後、沖縄の染織を再興しようとする動きが盛んになり、各地で事業協同組合の設立が見られるようになった。1970 年には仲里村久米島紬事業協同組合が設立され、その 3 年後の 1975 年には本部町において沖縄国際海洋博覧会が開催された。これにより沖縄の染織をめぐる動きがより活発になり、同年に琉球絣事業協同組合が、翌年には石垣市織物事業協同組合、首里織の那覇伝統織物事業協同組合、読谷山花織事業協同組合と琉球びんがた事業協同組合が設立された。

1980 年代に入ると、日本全体の経済発展と呼応して、沖縄においても地元産業の進展を受けて染織の生産が盛んになり、八重山地方においても 1983 年に与那国町伝統織物協同組合、1989 年に竹富町織物事業協同組合が設立された。しかしながら、1990 年代に入ると、日本経済は停滞しはじめ、国内の消費の落ち込みが染織にも大きな影響を及ぼすこととなった。

この流れを受けて、沖縄の染織の生産者は、地域振興の動きと連携して新しい対応をとるようになった。その一例が 1989 年に豊見城村の村おこし事業として始まった、サトウキビの葉を用いたウージ染めである。ウージ染めは 1993 年には商標登録され、2005 年には経済産業省から評価され、JAPAN ブランド育成支援事業に取り入れられた。この他にも浦添市が 2006 年に始めたうらそえ織や、沖縄市の知花において 2008 年に組合が結成され、2012 年に新しい伝統工芸品として誕生した知花花織がある。こうした染織は、和服や和装のための工芸品としてではなく、沖縄に豊富にある伝統から生み出した日用品のための染織として生産されている。

しかしながら、こうしたブランド構築が必ずしも成功するわけではない。2007 年から 2008 年にかけて、宮古島において宮古ブランドの島シャツをつくろうとする動きがあったが、機械織を想定する商工会の企画案に多数の反対意見が寄せられ、ブランドが発足することはなかった。

過去 20 年のあいだに、比較的若い年齢層の作り手それぞれが、ウージ染め、うらそえ織、知花花織をそれぞれに用いて服飾や雑貨などの新しいデザインの工夫を行うようになった。その結果、それぞれの地元で生産の持続性が見込めるようになり、それを保持するための工芸品のデザイン開発に、新たに取り組む必要が生じるようになった[29]。

---

[29] 松本由香／佐野敏行『沖縄の染め織りと人びとの暮らし』琉球新報社、2020 年、33－34 頁。

現代において染織は、以前よりも人々の生活に密着したものとなっている[30]。たとえば紅型や織りは、以前は生産組合で活動する人、つまり作り手だけのものであったが、現在は多くの人々によって幅広く行われるようになった。また組合での後継者育成事業、地域のカルチャー教室などで教育・養成された後、個人で独自に創作を続けるなど、さまざまな立場から創作が行われている。

次節では、再興を遂げた染織の中から八重山ミンサー織を取り上げ、沖縄の染織再興に関して分析する。

Ⅴ．八重山ミンサー織の再興

（1）ミンサー織の復活

明治以降の方言問題に代表される「沖縄的なもの」の否定は琉装にも表れ、ミンサー帯の需要は漸次減退していった。産業化せず、各家庭の女性によって製織されていたミンサー織は、戦後 10 年も経った頃にはすでに、竹富島に暮らすただ一人のみが最後の技術保有者になっていた。

ミンサー織が現在のような発展を遂げる契機を作り出したのは、1957 年に竹富島を訪問した外村吉之助（1898～1993）であった。外村は竹富島滞在で見た織物だけでなく、機や芭蕉・芋麻（カラムシ）などの織物の原料となる植物、石垣や家屋、歌、踊りなど島の生活に根ざしたあらゆるものに感激し、自身が所属する民藝協会を通して「民藝の島」として竹富島の地位を築いた。その後、竹富島内外でのミンサー織展示会や講演会、ミンサー織講習会が積極的に行われ、技術保有者は増加した。本土復帰後は売上を伸ばし、ミンサー織で得た利益を元手に民宿を経営するといった、観光客を受け入れる態勢が整え始められた。

一方、石垣島では 1960 年代にはすでに技術を伝える人もいなくなり、竹富島で織られたミンサー帯が店頭に並べられても、需要が少なく、長期間売れ残るような状況であった。石垣市内で洋品店を営み、そこにミンサー帯を置いていた新絹枝（あざみ屋みんさー工芸館館長、1926 年～）は、竹富の女性にミンサー織の技術を学び、1971 年にミンサー織を復活させた（あざみ屋開業）。

石垣島でのミンサーの復活は、当初から産業化を志向していた。その経済的理由として新絹枝は２点を挙げている。１つは経営していた洋品店で得た利益が、仕入れ元である東京、大阪、那覇などに流出していたことへの不満である。島内で一貫した生産をすれば、島内の利益を外に出すことなく、さらに「外貨」を獲得できると考えた。2 点目としては女性の職業の確保である。生活形態の変化、特に進学率の上昇は家庭の支出を増加させ、家計を圧迫し始めていた。島外へ進学することも多いため、子供の進学は家計にとって非常な負担であった。収入を増やしたくても石垣島にはそれほど大規模な産業も無く、外に働きに行けない女性のためにも、家にいて収入を得られる織物は適した手段であった[31]。

新絹枝とともに経営に携わり、洋装店をミンサー織専門店へと転身させた夫の新哲治は、戦前の標準語教育などの実体験から、復帰後の日本文化の流入を予想し、完全に同化するのに抗うた

---

[30] 同上、34 頁。

[31] 小田原澪「地域文化としての伝統工芸の現在―石垣島ミンサー織を事例に―」『沖縄文化研究』第 28 号、2002 年、403-404 頁。

めには地元の文化を強化するほかに方法がないと考えていたという[32]。観光客が増加し始めた時期でもあり、観光客のみやげものとしてミンサー織を生産することが有効だと判断したのである。

石垣島のミンサー織は、復活当初から藍染め以外の染料使用や帯以外の製品作りなど、それまでのミンサー織の概念を覆し、新たな需要を獲得する方策が検討された。また、生産の全工程を島内で行うためにも、当初は染め、織りの研究のほか、袋物など二次製品の制作方法の研究などが重ねられた。

（2）「八重山ミンサー」という統合をめぐる問題

異なった段階を経てそれぞれがミンサー織を復活させ、商品化していた竹富島と石垣島とが意識的に統合されたのは、1989 年に「伝統的工芸品産業の振興に関する法律（以下、伝産法）」による伝統工芸品指定を受けたときであった。以下はその文言である[33]。

1　伝統的な技術又は技法

（1）次の技術又は技法により製織されたかすり織物とすること

①先染めの経畝織りとすること。

②よこ糸の打ち込みには、「手投杼」又は「板杼」を用いること。

③かすり糸の染色法は、「手くくり」によること。

2　伝統的に使用されてきた原材料

使用する糸は、綿糸とすること。

3　製造される地域

沖縄県　石垣市、八重山郡竹富町

それまで復活ミンサー織の本拠地としての自負がある竹富島では、「竹富ミンサー」という通称を用いていた。竹富島は生産規模が小さく、単独では指定要件に合わないため、竹富町織物事業協同組合は石垣島の石垣市織物事業協同組合とともに、国による伝統工芸品指定を申請した。その結果、伝産法指定を受け、２島とさらにミンサー織を生産する小浜島、西表島のすべてが包含される「八重山ミンサー」が名称となった。

小田原の研究では、主体が不明瞭であるという難点はあるが、「八重山ミンサー」という名称について分析がなされている。小田原によれば、竹富島では「八重山ミンサー」という名称に不服がなかったわけではなかったものの、名称の問題だけで指定に参加せず、他の産地、特に石垣島だけが伝産法指定の利益を享受することになってしまったら、ますます竹富ミンサーの存続が危うくなるという危惧から指定に参加したという[34]。

現状においては、二次製品の加工に強い石垣島で生産された商品は観光客用に、より伝統的であることにこだわる琉球舞踊家などには竹富島でされる藍のミンサー帯を、といった具合に消費者の志向や生産の目的に違いも見られる。地理的に分けられ、同じの理念のもとに生産をして

---

32 同上、404 頁。

33 「あざみ屋・ミンサー記念事業」委員会編『ミンサー全書』南山舎、2009 年、31 頁。

34 小田原澪「地域文化としての伝統工芸の現在―石垣島ミンサー織を事例に―」『沖縄文化研究』第 28 号、2002 年、405－406 頁。

いる訳ではない2つの産地が同一視されているのは、伝統工芸品に指定されることで同じ製品を作っているという先入観が生まれ、同時に「八重山ミンサー」という名称が産地内の差異を隠蔽したからである[35]。

おわりに

本研究において着目したのは、沖縄の染織文化におけるグローバル・ナショナル・ローカルのせめぎ合いであった。前近代の沖縄において、グローバルな伝播を通して染織文化が形成された。その後、近代日本、すなわちナショナルな文脈において「沖縄的なもの」が否定されるという傾向があった中、柳宗悦ら日本民藝協会の沖縄調査によって琉球・沖縄の美術工芸品というローカルなものの価値が見直されるようになった。また日本民藝協会は、琉球・沖縄の美術工芸品をヨーロッパや中国、朝鮮、日本の美術工芸品と同様に価値を見出しており、ローカルとグローバルをつなげる役割を持っていたといえる。戦後の沖縄においては、各地で染織の再興が進行したが、その中でも、本研究において取り上げた八重山ミンサー織の事例からは、「八重山ミンサー」をめぐる統合の問題という、よりローカルなものの間のせめぎ合いを見て取れた。

今後の課題としては、今回は八重山ミンサー織に着目して研究を行ったが、沖縄における他の染織に関する事例研究を行う必要があるという点である。八重山ミンサー織がそうであったように、他の染織においてもグローバル・ナショナル・ローカルのせめぎ合いを見出せる可能性はある。また本研究においては、沖縄の染織文化を事例としてグローバル・ナショナル・ローカルのせめぎ合いを見て取ることができたものの、グローカル・ヒストリーの方法論として挙げられる、地域の分析をグローバルな問題につなげる点が非常に困難で、不十分となってしまった。この点を克服することも今後の課題として挙げておきたい。

グローバル化が進む現代において、ローカルなものの価値は捨象される傾向にある。しかしながら、ローカルなものはローカルな文脈においてのみではなく、ナショナル・グローバルなものとの相互作用によって発展するものである。それを明らかにするひとつの事例として、本研究を位置付けたい。

最後に、「沖縄のなかの世界史」を考察する意義について言及しておきたい。本プロジェクトの主軸となるのは、沖縄の歴史が世界史とどのように連関しているのかを分析することであるが、そこから明らかになるのは、沖縄の歴史は、沖縄という地域においてのみではなく、グローバル世界とのつながりの中で形成されてきたという点である。本プロジェクトは、その点を理解する一助となろう。また西洋近現代史研究室が沖縄の歴史を取り扱うことにも重要な意義がある。すなわち、自らの生活する地域の歴史を考察することで、自身の立場性を理解することにもなるのである。

---

[35] 同上、407頁。

【図像資料】

図１　インドの細帯

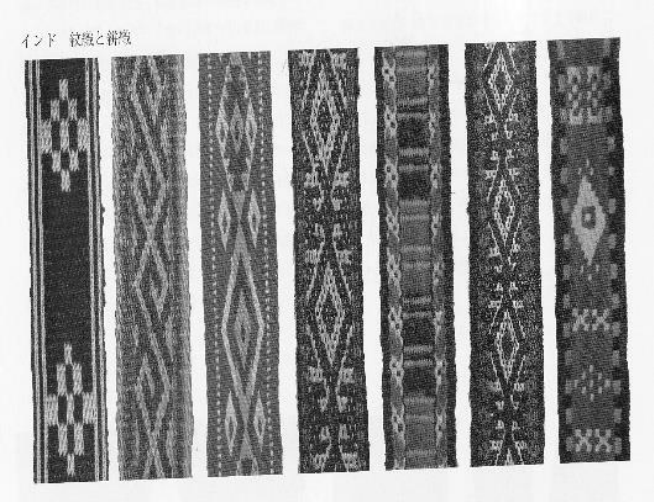
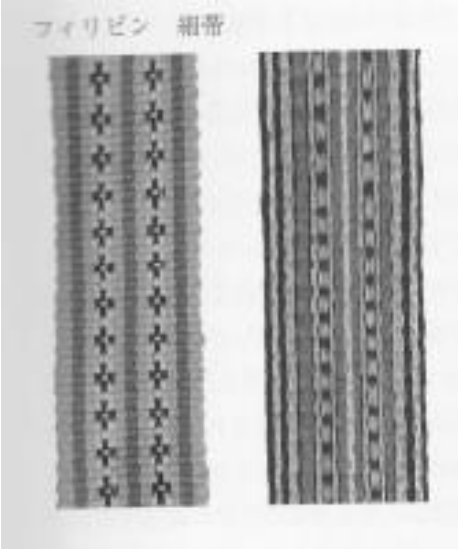


図２　フィリピンの細帯



［典拠:『ミンサー全書』10~11 頁より転載）

図３ 県外向けの琉球泡盛ポスター　1920～1930 年
［沖縄県立博物館・美術館所蔵］

『那覇市立歴史博物館企画展「近代沖縄の染織～貢納布から特産品へ～」』12 頁のキャプションでは、「沖縄県酒造組合聯合会・沖縄酒造組合による琉球泡盛の宣伝ポスター。紺地の琉球絣の着物をまとい、伝統的な髪型の美人がほほえむ、異国情緒のあふれるデザインとなっている」と説明されている。

図４ 琉球織物の宣伝ポスター　1930 年
［那覇市歴史博物館提供］

『那覇市立歴史博物館企画展「近代沖縄の染織～貢納布から特産品へ～」』8 頁のキャプションでは「鹿児島市内の比嘉商店に向けて描かれたポスター。琉球織物をはじめとして、沖縄の特産である泡盛、陶器などを取り扱っていたことが分かる」と説明されている。

【参考文献】

1. 自治体史、博物館による展示記録、自治体による調査報告書

石垣市史編集委員会編『石垣市史　各論編　民俗　上』石垣市、1994 年。

沖縄県教育庁文化課編『沖縄の染織』（沖縄県文化財調査報告書，第 126 集）（沖縄県史料調査シリーズ，第 1 集）沖縄県教育委員会、1997 年。

沖縄文化振興会史料編集室編『沖縄県史　各論編５　近代』沖縄県教育委員会、2011 年。

那覇市企画部市史編集室編『那覇市史　資料編　第 2 巻中の７　那覇の民俗』那覇市、1979 年。

那覇市歴史博物館『那覇市立歴史博物館企画展「近代沖縄の染織～貢納布から特産品へ～」』那覇市歴史博物館、2022 年

竹富町史編集委員会編『竹富町史第 2 巻　竹富島』竹富町役場、2011 年。

2. 二次資料

〔書籍〕

「あざみ屋・ミンサー記念事業」委員会編『ミンサー全書』南山舎、2009 年。

河西英通／浪川健治／スティール、M・ウィリアム編『ローカルヒストリーからグローバルヒストリーへ』岩田書院、2005 年。

小橋川順市『ミンサー織の夢を追いかけて―新絹江・哲次の歩んだ道―』沖縄タイムス社、2015 年。

櫻澤誠『沖縄現代史』中央公論新社、2015 年。

タンハウザー、ソフィ著、鳥飼まこと訳『織物の世界史－人類はどのように紡ぎ、織り、纏ってきたのか』原書房、2022 年。

田中俊雄『沖縄織物裂地の研究』明治書房、1952 年。

田中俊雄／田中玲子『沖縄織物の研究』紫紅社、1976 年。

藤本均『藤本均コレクション　絣の道』毎日新聞社、1984 年。

星乃治彦／池上大祐監修、福岡大学人文学部歴史学科西洋史ゼミ編著『地域が語る世界史』法律文化社、2013 年。

ポストレル、ヴァージニア著、ワゴナー理恵子訳『織物の文明史』青土社、2002 年。

松本由香／佐野敏行『沖縄の染め織りと人びとの暮らし―家族と地域文化、経済とツーリ ズムから考える―』琉球新報社、2020 年。

安江孝司「「イカット・ロード」と琉球・沖縄絣の史的文化意義―識者の所説を通して見た一つの理解―」島尻勝太郎・嘉手納宗徳・渡口真清三先生古希記念論集刊行委員会編『球陽論叢』ひるぎ社、1986 年。

柳宗悦『芭蕉布物語　新版』榕樹書林、2016 年。

〔論文〕

小田原澪「地域文化としての伝統工芸の現在―石垣島ミンサー織を事例に―」『沖縄文化研究』第 28 号、2002 年、383－438 頁。

木畑洋一「歴史学におけるグローカルな視座」『グローカル研究』第 2 号、2015 年、113－120 頁。

久貝典子「日本民藝協会同人の沖縄調査―昭和 13 年～15 年にかけて―」『沖縄芸術の科学：沖縄県立芸術大学附属研究紀要』第 22 巻、2010 年、21－63 頁。

通事孝作「八重山ミンサー」『繊維学会誌』第 62 巻 8 号、2006 年、249-252 頁。

安江孝司「「本土復帰」後の沖縄伝統工芸産業振興と久米島紬の問題状況」『法政大学教養部紀要 / 法政大学教養

部 編』第 59 号、1986 年、1-42 頁。
安江孝司「絣の文化圏―「絣の道」と沖縄絣の系譜をめぐって-上-」『法政大学教養部紀要 / 法政大学教養部編』第 91 号、1994 年、51-83 頁。
安江孝司「アジア染織(絣・絞・更紗)にみる技法と霊位の契り――インドから沖縄まで」『専修人文論集』専修大学学会（56）、1995 年、183-222 頁。
安江孝司「アジア染織文化圏と絣の道・沖縄絣」『学術フロンティア・テーマプロジェクト「アジアの中の日本学」研究報告』第 5 号、2008 年、1-120 頁。
Bsumek, Erika Marie, “Value Added in Production and Trade of Navajo Textiles: Local Culture and Global Demand,” in A. G. Hopkins,ed., Global History: Interaction Between the Universal and the Local, Red Globe Press, 2006.

【解題　池上大祐】

琉球大学西洋史研究室（担当教員：池上大祐）では、学生を主体とした共同研究「沖縄のなかの世界史発掘プロジェクト」を実施しています。本プロジェクトは、自らの生活する足元（＝地域）の歴史が世界史の動向のなかでどのように位置づけることができるのかを調査・研究することを主眼とし､以下の４つの点を念頭におきながら､年度ごとにひとつのテーマを定めています。（１）ゼミ生たちが自らテーマを選ぶ。（２）必ず、現地フィールドワークを行い、自治体史を活用する。（３）ゼミ生自らが役割分担を決めて、作業を共有しつつ協同して進める。（４）沖縄県内外の学生や研究者の前で研究成果を報告する。

2022 年度の共同研究の具体的な進め方は以下のとおりです。

2022 年 5 月～6 月：テーマの選定。先行研究の整理

2022 年 6 月～11 月：文献リサーチ

2022 年 11 月：石垣島のフィールドワーク

2022 年 2 月：琉大世界史研究報告会 で中間発表

2023 年 3 月：琉球沖縄歴史学会 3 月例会での報告

2023 年 5 月：論文の提出

今回は、本プロジェクト開始以来、はじめての「モノ」からみた歴史を扱うこととなりました。私自身、「モノ」をあつかう歴史研究の経験もなければ、日常生活において織物文化に深く接したこともない状況だったことから、学生に対して助言・指導するというよりは、学生とともにひとつひとつ学んでいくというプロセスになりました。沖縄の染織文化を紐解くと、宮古上布、芭蕉布、花織、首里織、久米島紬など多岐にわたり、包括的に扱うことは難しいと判断し、八重山ミンサー織に絞ったかたちとなりました。

2022 年度からは初めて、後期に開講する「世界史実践演習」（いわゆる史料読解スキルを習得する演習科目）の英文テキストを、共同研究のテーマに関連するものから選ぶことで、アメリカン・インディアンのナバホ族の織物文化とグローバルヒストリーとの関係について論じた英語論文の翻訳を行いました。沖縄と世界史をつなぐための回路を開拓する目的でこの方法を導入したものの、それでも世界史の文脈とどうつなげるのかがとても難しく、前近代における織物文化のグローバルな伝播という文脈で「イカット・ロード」論を扱うことでなんとか担保するにとどまりました。それでも「地域」（ローカル）の文脈をより生かすべく、今回ははじめて「グローカル・ヒストリー」という概念を使うことで、「八重山ミンサー織」という「伝統」を創造した現代的意味に迫ることは一定程度できたのではないかと考えているところです。

コロナ禍が明けて、ようやく宿泊を伴う研修調査旅行も可能になった。今回の研究調査では、石垣島の「あざみ屋みんさー工芸館」を訪問し、館員の方に館内展示のガイドをしていただいた（機織りも体験させていただいた）だけではなく、館内閲覧中に学生からの質問にも快く対応くださったことに改めて御礼申し上げます。加えて、琉球特産品の宣伝ポスターを図像資料として掲載するにあたり、所蔵先の那覇市歴史博物館および沖縄県立博物館・美術館さまにおかれましては、快く許可くださったことに心より御礼申し上げます。